3 大井実のBOOKな話

福岡市内で書店『ブックスキューブリック』をいとなむ大井実さんの、本のある日常をつれづれに。

撮影／川上信也

年をとってもまったく魅力が衰えない、憧れの〝ファンキーじいさん〟たちがいます。

植草甚一（うえくさじんいち）とローリング・ストーンズ。私の憧れの〝2大ファンキーじいさん〟たちです。植草甚一は知らない方も多いかもしれません。とても味のある文章を描くエッセイストで、雑誌『宝島』のかつての責任編集者。植草が注目されたのは70年代で、すでに60代だったにもかかわらず、奇抜なファッションと独特の風貌がとにかくかっこいい。当時の若者のカリスマでした。映画やモダンジャズに造詣が深く、古本をこよなく愛し、気の向くままに日々ぶらぶら散歩を楽しむ、究極の趣味人。そんな彼の魅力を余すところなく楽しめる本が『植草甚一スタイル』です。身長151cm・靴のサイズは23cmと小柄な見た目とは裏腹にビッグな存在感を放ち、ニクいほど洒落たライフスタイルを持つ。奔放で気ままである意味わがままな愛すべき自由人を、秘蔵写真や興味深い文章で満喫できる一冊です。植草が注目されたのはたぶん、70年代という時代背景も影響していたでしょう。理想を掲げながら厳しい現実に挫折した若者たちは、飄々と自分の好きなことだけを追求する植草の生き方に大きな共感をおぼえ、憧れを抱いたのではないでしょうか。

そして、我らがローリング・ストーンズ。これは30年前に買って、最近聴いて再びしびれた『LET IT BLEED』。伸び縮みしながらうねるように展開するサウンドにはロックの奥深さを感じるのですが、かといって決してマニアックではない。どこか肩の力が抜けていて、ロックは苦手という人にも非常に聴きやすいはず。1曲たりとも駄作のない完成度の高いアルバムで、年をとっても衰えることのない彼らのかっこよさの原点を感じ、どんどん引き込まれてしまいます。

年をとってもパワフルで魅力的でセクシー。私もそんな70代を目指そうと決意を新たにする今日この頃です。

コロナ・ブックス『植草甚一スタイル』平凡社／1,680円

『LET IT BLEED』
ザ・ローリング・ストーンズ
※版権の都合により、アルバムジャケットの掲載は控えています。